

オクタビア・ヒル

三年 平山 耶幸
二年 山崎 浩子

前 ぎ

十八世紀後半より十九世紀前半にかけて、産業革命を成し遂げたイギリスでは、

十九世紀の中期には、資本主義体制より発生する社会的諸問題が漸次表面化しつつあった。近代社会事業の萌芽もこの期に表われはじめた。この時代にオクタビア・ヒルは婦人の社会事業家として活動している。

彼女は一言にして云えば住宅改良の先駆者といひ得るが、その活動の範囲は貧民窟の改良、居住者の性格改善、ワーカーの養成、公共地の開放等、広範囲にわたるものである。

彼女が婦人の社会事業家である事と共に日本の社会事業の歴史にはみられない住宅改良を行つた人である事、日本には未だ充分に紹介されていない事の三点が、我々のオクタビア・ヒルを採り上げた主な理由である。

私達は彼女の生涯、社会事業を貫く精神、仕事の社会的価値に主眼点を置いて、述べてみる事にする。

資料として次のものを用いた。

「Octavia Hill」 by E. Moberly Bell.
「British Social Work in the Nineteenth Century」 by Young & Ashton.

「Social Science Dictionary」.

英国社会史 トレヴェウエイマン (林

訳)

イギリス労働運動史 C・D・コール他

(林訳)

社会思想史 大河内一男等

出 生

オクタビア・ヒルは一八三八年ロンドンに父ジイムス・ヒルの子として生れた。ジイムスの二番目の妻が一人の息子と五人の娘を残して死亡した後、これ等の子の養

育と教育を受けもつていたキャソリン・スーズウッド・スミスが三番目の妻となり五人の娘を生んだ。オクタビアはその三女である。従つてオクタビアの兄妹は十一人で彼女はその九番目である。ヒル一家は代々農業兼商人であり、彼女の祖父の代にはかなりの資産をもつ銀行家でもあつた。父は一八二五年の大恐慌によつて銀行が閉鎖されその後、穀物や木材の仕事によつて再建をくだてるのみでは不満足で、その他いろいろの仕事にも従事した。社会改良の熱意にもえて公共の活動も行い、イギリスで最初の幼児学校等を設立している。母キャソリンは知的道德的で実行力のある婦人であり教育的見地からみれば、夫と同様に一神論者で信仰深い人であつたといわれる。彼女が生れた前後のイギリスは選挙法の改正、一八三四年の新救貧法の成立、又チャーティスト運動等をめぐつて、労働者の階級闘争が活発となり、社会主義を目標

す動きも起りつつあつた時代、いわば資本主義社会における矛盾が明確となつた時代であつたといえよう。

幼少時代

彼女が二才になつた一八四〇年父が破産して生活は困難となり、家族は点々と住居を変え生計の建直しにはげんだがおもわしくなかつた。その後父が死亡し母方の祖父が生活上の責任を負うようになつた。この祖父の生活態度、公共的精神、頑固さ、不屈のエネルギー等はなんらかの型で彼女に影響を与えている。この祖父こそ衆知の通り社会的には医師として当時のイギリスにおいて種々の社会問題において貢献し、イースト・エンドにある病院に所属し、貧民地区に対して正確なる判断を下した、衛生改良家として広く知られてゐるサウスウッド・スミスである。幼少時代の彼女の性格は陽気で健康的な活力を有し、大自然を友に成長した。又幼い頃より他人の悲しみを苦痛と感じる同情心が強く、アイルランドにおけるトマトの飢饉を知つて幼い胸を痛めていたといわれる。イギリスには未だ教育法が施かれず大半の者は教育を受けていない状態で彼女も又母から教えられたのみであ

る。又祖父の衛生改良の書類の手助けや、祖父のもとに集まる社会問題に関心のある人々の議論にも接し、早くから社会悪に対する疑問を持つ機会を与えられ、生涯を通じて解決を与えた幾多の問題とは幼き頃よりなじんでいる。母はその生活を通して、何でもいふ事のなかに幸福を見いだす能力を与え、とるべき態度として、「もしなす事が正しいと思えば、それはなされなければならない、即ち正しい事に対して疑う事をやめよ」とゆう事を自らの行為を通して教えたといわれている。即ち、彼女の生涯を貫く健康的エネルギー、未知の事に関する強烈な好奇心、他人の悲しみに対する深い同情心、美に対して持つ感覚的認識、基礎的なものの考え方、義務感等は、幼少時代より養なわれていつたのである。

青年時代

当時、キリスト教社会主義者は、信仰にのみ重点を置き、社会的なつながりのないキリスト教及び急進的な社会主義者を批判し、両者を近づける事を主張していた。その仕事の一端として婦人協同組合が設置されていたが未亡人となつていたオクタビアの母は、家庭を支えるために、セクレタリ

ーとしてそこに働く事となつた。この事は彼女の将来の仕事の基礎となる幾つかの経験を与えている。即ち、彼女の社会事業の精神的根拠であるキリスト教社会主義に接した事、社会事業への最初の認識を得た事、更に大都市の集団的貧困者を実際にみて貧困への問題意識が芽ばえた事である。彼女は母に従つてロンドンに出たが、彼女がロンドンの貧困を現実にする事によつて与えられた衝撃は非常に大きく、何年か後になつて手紙の中に「ロンドンの悲惨と荒廃の凡ての重みが私の上にのしかかつて来た」とこの時の実感を述べている。又メイヒューの「ロンドンの労働者とロンドンの貧困」を読む事によつて、彼女の中に芽ばえつつあつた信仰も大きく揺すぶられ物事の正しさを完全に信頼していた彼女は、殆んど絶望的になつてしまつた。姉のミランダが仕事をしながら笑つたり、冗談を云つたりする事に対して、「人々がこんなに苦しんでいる時に笑つていられるなんて」と理解しかねる様子を示す彼女であつた。この様な時に読んだキリスト教社会主義者のパンフレットや論文は、彼女に悪と闘う方法を暗示してくれた。この頃から彼女はマウリスの説教を聴きに通いはじめた。

人間悪への悲しみを感じて何かの役にたきたいと切望しながら自分の無力さを意識していた未だ十三才の彼女は、マウリスの悪を攻撃する勇氣と彼の全存在のキリスト教への完全な没入に強く動かされ、十五才で洗礼を受けたといわれている。

ロンドンでの彼女の仕事は貧民学校の子供達のために始められた a toy furniture business である。わずか十四才の時からはじめられたが明確な方針—子供達に利他主義、芸術的興味、職業的熟練を植えつける事—をもつて仕事を進めた。非常に貧乏で、粗野で、墮落しているとさえみられる少年少女達を、一人一人友達或は Co-worker として個人的に知る事により、彼等との間に関係を結ぶ事に努めた。しかし単に切り離された個人としてではなく、あくまで繋りの中の個人としてとらえたといわれている。

彼女は又この時代にラスキンと知り合う。一八五〇年の或日、母の協同組合の仕事を見に訪ずれたラスキンは、傍らにいたオクタビアに目を止め、彼女に深く印象づけられ、同時に、彼女も英雄崇拜の少女的憧憬から彼に引かれ、その後親密な関係が始まった。ラスキンによつて彼女の美に對

する感覚は増々洗練され、絵を描く事が彼女の関心を占領してしまつた。この頃彼女は彼女の社会的な働きにも拘らず、尚、芸術こそ彼女の天職であり、社会事業は余暇の仕事であると考えていたといわれる。

一八五七年母の失職即ち家庭の経済的支柱の喪失、彼女の病氣等、重なる不幸がおこる。しかし一八六〇年には再び健康を取り戻して、キリスト教社会主義者達の開設する婦人労働大学に職を得る。この時代は家庭の経済的支柱となるために働いた時代である。しかしこの間、神の前に不平等な状態にある人々を見て、必ずしもその事実を社会的矛盾としてとらえず多分に感覺的ではあつたが、その中に不正義を感じとつた事は、その後の彼女の人生の方向すけの大きな要素となつて働いたと思われる。

住宅改良時代

改良事業に入る前の彼女の野心は、青年時代にめざめたごく偉大なる芸術家になる事であつた。従つて社会事業家としての彼女を貫ぬいた精神即ち平等觀にもとづく博愛心は、徐々に育つたものであつた。交わりを断たなかつたトイメーカーや、婦人労働大学の生徒との友情が、人間を根本か

ら平等に愛すという信念をより強いものとしたのであろう。だが芸術家を旨としていた彼女を改良事業に向かわせた直接の動機は何であつたのであろうか。

週一回貧しき親子達のために、裁縫の講習や歌の指導をしていたおりに、この中の母親が疲労が原因で気絶した事件がおこつた。この母親を家につれていくにおよび、地下室の不衛生な住宅状態を知り、貧しき人々を收容し健康的に管理できる家を持ちたいと強く感じた。この様なおり丁度ラスキンが父親から受けついで財産を所有していたのでその援助により、一八六五年彼女が二七才のとき、三つの貧民窟をそこに貧民が住んでいるままで買いとるとゆう事をした。更に翌年には四つの貧民窟の管理をするようになった。その居住者の構成は無気力な人々、貧民、失業者、半失業者等で粗野であり家庭生活は常に不安定であつたといわれている。彼女は家主と居住者の間に相互的義務関係を確立するために、自分自身家主として建物の改修を行う事に全力を注ぎ、彼等には契約の履行として家賃を払う事を要求した。しかしその日暮しの彼等には計画性のある家賃支払いはどうして不可能である事を知り、自らの足で家

賃を集めて歩いた。この間居住者達の家賃不払いは、雇用の不規則性から来る事を認め、貧民窟の中で職を与え働かせた。又貯蓄銀行を設けて貯蓄の習慣をつけた。遊ぶ事を知らない子供達にはゴミ捨て場になっている空地を整備して遊び場を与え、自らを過少評価してゐる大人達には、趣味のクラスをつくて社会の一員たる事の自覚をもたせた。しかし劣悪な状態に溺れて、何ら改良の意味を認めない居住者にその気持を起すという事は容易な事ではなかつた。細かい事にまで目を向ける彼女を、彼等はうるさく感じた事が度々あつた。彼等が彼女の為そうとしてゐる事を理解し協力してくれる迄には相当の忍耐力を要したのである。彼女の仕事は修繕された家に居住者を住まわせる事から、彼等一人一人と親しくする事により彼等の性格を改善する事にまで進められた。即ち自尊心を傷けられてゐる人々に、誇りと、独立の精神を持たせ、その日暮しの生活から計画と秩序のある生活へと移行させる事に努力した。彼女は管理者としての優越感を居住者に感じさせる事なく、生活を共にした。次第に彼女の仕事は社会から注目されはじめ、見学の依頼をしばしば受ける様になつた。しかしそれは仕

事に夢中になつてゐる彼女にとつて、悩みの種であつたといわれている。居住者達が訪問者の好奇心にさらされる事に我慢出来なかつたのである。又彼女は専大な態度、考え方をした慈善家達を非難し気まぐれな施しをする軽蔑的な寛大さを非難した。彼女は断呼として金持が貧民を精神的、知的奉仕の対象にあてると言う考えを拒絶してゐる。この管理が成功した理由は、第一に彼女のたゆまぬ努力があげられる。即ち結果として居住者が彼女を真に理解し、彼女の指導に従い、一個の人間として、自己を判断する能力を与えられたことによる。この成功はロンドンに広範囲に存在した類似的な救済にまで進み、又彼女の『貧者は基本的に人間個人としては変りなく、貧困それ自体が悪弊であるのではない。おかれてゐる諸条件のために精神的独立が不可能なのである。従つてそれは援助する事により自立ある生活に導くべきだ』とゆう方針はイギリスのみならず、ベルリン、ミュンヘン、スエーデン、オランダ、アメリカ、ロシアにおいても認められて適用されたといわれている。

ワーカーの養成

彼女の仕事が彼女自身が余り望まなかつたのにも関わらず、公に認められるようになり、活動範囲が拡大され、同時に彼女自身も自分の限界、及び短い生命について考えたときに、「多くの貧民のために私が働くよりも若い人々を直接働かせるようにした」とのべて助力者達の養成を行なつた。それは単なるボランティアとしてではなく、専門家として、人を処理する事を学び、人々の環境、情況、それを実証する方法を理解するための必要性を強く感じ、彼女の活動を真に理解する人々により与えられた活動資金をもととしてはじめられた。その養成方法は「自分自身を先導し、自分自身を詳細に取扱ひ、自分についても仕事を通じて考えよ」とゆうもので、主体者自身の問題を第一として行なわれている。当時彼のもとへは、イギリスのみならず、ドイツ等からも学びにくる者が多数あつたといわれる。

その他の活動

公になる事を極度に嫌つた彼女も仕事は社会的に受け入れられる様になると、自分の仕事にだけ止まつてゐる事は不可能であつた。議会で住宅改良に関する発言を求め

られたり、C・O・Sの勤労者階級の住宅に関する特別委員会からの協力の依頼、教会からの住宅管理依頼、救済法委員会のメンバーとなる事等公的責任を果す事も彼女の仕事の一つとなつた。

幼き頃より表現能力のあつた彼女は、後年になつてますます筆のたつ人間となり、雑誌、新聞等にいろいろと論文を出した。

それ等がまとめられて、一八七五年アメリカにおいて“Homes of the London Poor”と題して出版されている。一八八五年にはイギリス国教会からも貧民街の管理を意託され、そこにおいても彼女の信念のもとで人々はたち直つてゐる。又地域のセンタールの役割をはたす赤十字ホールの設立にも努力し、都市の青少年の健全な育成のための事業に働いている。又労働者や貧困者のために、共有地、公園、歩道等の開放地を責任をもつて引受け管理する団体において、永久的に土地を確保する仕事にも従事していた。

私生活

彼女は、過度の活動の結果、健康を害した時を利用して海外にも出、その見聞を大いに広めている。一八七七年彼女が三十九

才のとき、婚約をしたが、彼女の目的とする事と、相手のそののちがいを知るにおよび、数カ月後に破棄している。彼女の結婚に関する考え方は「自己の独立の犠牲を意味する、結婚は夫への服従を意味する」というような考えであつたといわれる。

晩年時代

生涯の最後の十年はあらゆる公的責任から退き、これまでなして来た仕事の整理と後継者の訓練に専念している。彼女の病氣、協力者の死、信頼しきつていた三人の同僚の個人的理由からの離職等は「今までやり方をあらため、再建しなければならぬ」と彼女を奮起させてゐる。彼女は一層後継者の養成に主力を注ぎ、マリレーボン・ロードの或る一室で毎週ワーカーの報告会を行い新しい問題を提起していた。彼女は凡てのワーカーに高度の知識を要求し厳しく訓練した。その厳しさは訓練の後のワーカー達がオクタビアの友人ミス・ヨークから慰められ、それによつてはじめて彼等は再新された勇氣をもつて仕事に付く事が出来たといわれる程である。訓練に當つて彼女はその方針を述べてゐる。「私が歩んで来た道程に盲目的に従つてもらいた

くない。新しい情況は種々の努力を必要とする。永続するのは精神であつて死んだ形式ではない」と。

彼女は晩年には公の問題に異議をさしはさむ事を止めているが婦選論に関しては別であつた。個人の自由と権利が早くから保証されていた当時のイギリスに於いても婦人の社会的地位は極めて低かつた。J・Sミルの「婦人の隷従」(一八六九)の出版以来注目されつゝあつた婦人問題が、一九世紀末から二十世紀初頭にかけて漸く表面化し、婦人参政権運動となつて展開される事となつた。婦人先驅者といわれる人々や職業婦人の殆んど全部がこの運動を支持していた。しかしオクタビアは一九一〇年七月のタイムズの紙上で、男女の異つた天賦を主張する事により婦選論に対する反対の立場を述べてゐる。その彼女の態度に対して婦選論者達は「何故彼女は排泄を調査したり、悪い居住者を近ずけたり、貧民窟を改修したりするよりも婦人らしい事をしないのでしよう」と非難したといわれている。漸次彼女の身体は衰えを見せはじめ、一九一二年イースターの時に病の不治を知り、「私は事業にほんの一寸手を触れただけであつた。しかしそれは完全に組織だて

「られていると考えます」と語り、自分が予想した以上に多くの事を完成させた神への感謝と喜びの中に、八月十二日夜永久の眠りに就いたのである。葬儀も自らの名を公にする事を好まなかつた彼女の意志をくんでウェストミンスター寺院で執り行う様にとの政府からの要望を断り、親しい者のみの手で行われたとの事である。

結 び

一人の女性をして社会事業を行わしめるまでに導いた信仰とは一体何なるものであろうか。彼女の信仰の師は従来のキリスト教が信仰のみを強調し、社会問題に対して無関心である事を批判しているキリスト教社会主義者の一人、マウリスであり、彼の教導こそ彼女の社会事業への決意を固からしめたといえよう。彼女は彼から凡ての個人の無比の価値について教えられ、各人は神の庇護を受け神の意思で造られ神の前に平等であるという信念をもつにいたつた。この信仰が対象者を扱うに当つて、ケースワーク的な方法を生み出し、且つ上層階級の自己満足的な貧民への慈善や寄附を拒みつけさせたのである。近代社会事業の

萌芽期であり、全く暗中模索の時代に、明確に「個人は平等である」という意識をもつて社会事業を推し進めた点で、彼女は人権尊重の民主主義の原理を基盤とした近代社会事業のバイオニアとして高く評価されてよい。又彼女は思想家ではなく実行家である。同時に芸術家として立とうとした程繊細な感覚の持主で、極めて地味なタイプであつた。「ひたむきな努力家」という言葉のびつたりする人で、それを強固な意志が支えていたといわれている。彼女は仕事を私的且つ個人的なものにとどめ、公的な仕事になる事を常に嫌つた。義兄は「彼女はどんな組織よりもずっと重要なものとして、貧者との個人的な親密な関係を重んじていた」と語っている。彼女の仕事の目的は、個人の人格の成長であり、彼女の為す物質的援助も精神的な目的の手段に過ぎなかつた。彼女は社会事業が規則や詳細な法律にからませられた時に、個人的な接触は姿を消してしまうおそれがあるとさえ、考えていたのである。彼女の社会事業観は内面的、主体的な面にのみ重きを置き、近代社会事業の本質をなすもう一つの点、即ち国家を含めた社会関係の中に社会事業をと

らえる事は、していなかつたようである。彼女は又、改革者の中で最も理論的でない人であつたといわれている様に、その社会事業も彼女の身辺に横たわる社会的な問題を取り上げながら、それを全体の問題へと広げ、又それが社会と如何なる関係をもつのであるかを見極める社会科学の基盤に立つ問題処理を行つていない点も事実であらう。これ等の点とはかく婦人の社会事業家の陥りがちな共通の弱さを彼女も又もつていた様に思うのである。

しかしそれ等の彼女の欠点にもかかわらず、その仕事に於いて、個々人の需要（ニード）に基いたケースワーク的な方法を行つた事、専門職としてのワーカーの養成に力を注いだ事、又彼女が貧民窟の醜さ、むさくるしき、単調さの中に、美的な潤いの幾分かでも与えるために、その全生涯を捧げ尽した事は、真に意味深い事実である。友人ハーフブリスが「彼女は死んでしまつた。だが、彼女は精神を伝えていた」と述べている様に、現在も尚、彼女の人生を生きたぬいた輝かしい精神は、近代社会事業の根底に脈々と流れているのである。

「オクタビア・ヒル」の年譜

(▽印が業績)

年	オクタビア・ヒルの生涯	ヒルの年齢	英国における主な出来事
一八三八	英国、ロンドンに生る	一	
一八三九	父の事業が破産し、生活の困窮をきたす	二	チャーティズム運動おこる
一八四〇			ロンドン生活状態改良会設立
一八四四			ロッヂデール消費組合設立
一八四五	祖父の衛生改良に関するレポートの写しを手伝う	七	公衆衛生法制定
一八四八			
一八五〇			モーリス労働者福利増進協会設立
一八五一	マウリスの説教する教会に通い説教を聞く	一三	シャフツベリー条令制定
一八五四			感化院条令制定。ロンドン、ウオーキングメッドヒル農業殖民
一八五五	ラスキンの影響を受ける	一七	
一八五七	過労から病気になる。母は失業し、家庭の経済的支柱を喪失する	一九	
一八六〇	▽健康は回復し、婦人労働大学に勤める	二二	

一八六二	▽ノッテンガム・ブレイ スクールを開校	二四	
一八六四	クイーンズカレッジからスタンレーによって教員免許を受ける	二六	
一八六五	▽ラスキンの援助によつてノッテンガムブレイス附近にある閑地の三軒を買ふ	二七	ブリス・ロンドン貧民街に伝道
一八六六	▽さらに、庭園つきの四軒の家を買ふ	二八	
一八六七	過労の為病気になる、休養にイタリアにゆく。ノッティンガム、ブレイススクールの整理を、姉のミランダに譲る。	二九	
一八六八			
一八六九	▽Marylebone の C. O. S の会員となる	三一	デニソン・イーストエロンドンに住込む
一八七一	▽年報をかきはじめ	三三	防止協会 慈善救済貧窮強制種痘法制定
一八七五	▽アメリカで著書「Homes for the London poor」が出版		クロッス条令制定
一八七七	エドワード・ボントと結婚	三九	バッファロー慈善組織
一八七八	病気が同年破産する	四〇	協会発足
一八七九	行に出る		ブリス救世軍組織
一八八三	▽事業が世界的に拡大する	四一	
一八八四	▽ノッテンガム・ブレイ		トインビー死去す 全国、児童虐待防止会設立

ススクールは閉鎖さる。 しかしオックスフォード 大でイーストエンドに関 しての講演、又バーネッ トのセツルメントの援助 もする	一八八五	▽デット・フォードにあ る八五軒の家の管理を引 受ける	四七	トインビーホール設立
▽ナショナル・トラスト と呼ばれる共有地、開放 地の管理及び買入れに活 躍する	一八八六		四八	
エリザベス女王即位六〇 年祭にウエストミンス ター寺院の席を受ける	一八八七		四九	
▽サウス・ワークに赤十 字ホール、庭園を開放す る	一八八八		五〇	
▽サウス・ワークの女子 大学のセツルメントに参 加する	一八八九		五一	国民結核予防協会発足
一八九一				チャールス・フース貧 困線の設定
一八九二		▽ワーカーの爲の Train- ing Course の計画をは じめ、同時に経済的援助 を世間に訴える	五三	
一八九四				英国救貧法地方条令 制定
一八九七				カトリック教慈善協会 発足
一八九八			五九	幼児生命保護法制定
一八〇二		母死去する	六二	失業労働者法制定
一八〇三				児童相談所発足
一八〇四				
一八〇五		▽救貧法の Royal Com- mission の調査	六五	

一八〇八	Royal Commission を 辞める	六八	児童法、養老年金法 制定
一八〇九			労働紹介法制定
一九一〇	姉、ミランダ死去する	七〇	
一九一一	▽婦選論に反対する		強制失業保険制度樹立
一九一二	病気になる	七二	
一九一三	老衰の爲、七〇余年の生 涯をとじる	七三	精神薄弱児法制定

この稿は前記の二人が執筆したが、次の十名が英書講読及び討論に参加した。

(三年)

川島 黛子
牧野 治子
南葉 奈美子
近藤 みどり
黒沢 純子

(二年)

八木 圭子
松尾 昌子
真田 和子
石川 道子
千野 幸代